

## 母との約束

医療関係の道を選択したのは、看護師だった母がガンに罹患したからだ。それまで私はカフェでアルバイトするなど、人と接する仕事が好きで、そこにやりがいを感じて過ごしていた。特にお客さんと会話することは楽しく、しだいに本音で話をする方が増えてきた。皆さん、病気と向き合うことは「体力的にも、精神的にも辛い」と口を揃えて言う。しかし、当時の私にとって病気は、それほど痛切なものではなかった。ガンと打ち明けられても、大変な病を抱えて気の毒だ、とは思うものの全く未知の世界で、他人事のように感じていた。

そんなとき、体調が悪くても「少し休めばマシになる！」という元気な母が「胃が痛い。病院に行きたい」と弱音を吐いた。今、母の様子を思い出せば、腹部に手を当て、顔をしかめているときがあり、以前から痛みを我慢していたように思われる。近くの病院で胃カメラ検査をした結果、「紹介状を書くから大きな病院に行ってください」と母は医師から告げられた。

その後、母は精密検査を受け「播種性の胃ガン」と宣告された。私は突然の不安感に襲われ、母が辛い思いをするかも、という悲嘆で涙が止まらなかった。その日、父と一緒に母の病状について話し合った。戸惑う私たちに母は「ガンやろ？自分の事やし、教えて」と、あっさりとした口調で訴えてきた。父が思い切って「これからの治療を考えよう」と伝えると、母は「頑張っって向き合うわ。ガンの人の光にならんと！」と明るく笑ってくれた。

抗がん剤治療を受けながら、母はその後看護士として働き続けた。私たちに悲しい顔や辛い顔を見せることはなく、職場の同僚にさえ、ガンだと気づかれなような、明るくて面白い、普段通りの母だった。そんな母が、闘病中に私に、こっそり自分の気持ちを打ち明けてくれたことがある。患者さんが「あなたがいると明るくなれる。だから、この病院に通うし、あなたがいなくて寂しい、って言うねん。だから私は仕事を続けて、いろんな人の希望になりたいし、患者さんの言葉で、私も自分がガンだってことを忘れて、看護師をやれる」と。本当は体も心も辛いはずなのに、患者さんのために、と仕事に向かう母はとても逞しく輝いて見えた。しだいに私は、自分の仕事に誇りを持つ母のような看護師になりたい、と強く思うようになった。やがて、私は接客業から転職し、看護助手として働き始めた。患者さんと関わる中で、もっと看護技術を身につけたい、もっと胃ガンについて勉強して母の支えになりたい、その一心で忙しい毎日が過ぎていった。

母の病状は小康を保ち、闘病3年目に入ろうとしていた。安堵しかけたそのとき、母の容態は急変し、帰らぬ人となってしまった。それでも母は「頼んだで、頑張っって」と最後まで「看護師になる」という私を励ましてくれた。亡くなる直前まで、看護師としての人生を全うした母との約束を、私は必ず叶えたいと思う。